

# 掲 示 板

## 歴史講演会開催のお知らせ

今年度は横浜開港資料館調査研究員・國學院大學兼任講師の吉田律人氏を講師に迎え、「川崎と軍隊―大山街道を中心に―」をテーマに、大山街道を中心とした近代日本における川崎と軍隊との関係を辿っていきます。  
日時、会場等は以下の通りです。参加ご希望の方は当日会場にてお申し込みください。なお、ご来場の際には公共交通機関をご利用ください。



皆様のご参加をお待ちしております！

日 時：令和2年3月8日（日）  
14:00～16:00（開場13:30）  
会 場：高津市民館12階 大会議室  
受講料：無料  
申込み：当日会場受付

## 古文書講座を開催しました

この講座はある程度古文書が読める方を対象にしたもので、令和元年11月24日（日）から毎日曜日、全4回にわたり行いました。腕に覚えのある50名が受講し、盛況裡に終了しました。  
今回のテーマは「幕末期の川崎と横浜開港」。講師を務めた東海大学非常勤講師の神谷大介氏が、当館所蔵「志村文雄家文書」に含まれる「御用留」をテキストに、横浜開港が川崎で暮らしていた人々に与えた影響とその対応の様子について読み解きました。  
受講者の皆様からは「幕末の村の様子がよくわかり、興味深かった」とのお声をいただきました。

### — 川崎市に関わる「古文書」を探しております —

当館では川崎市に関わる江戸から昭和期まで含めた「古文書」などの歴史資料の調査・収集を行っております。もしご自宅に何なのかよく分からない、または置場が無くて困っている「古文書」などがございましたら、是非当館までご連絡の上、ご相談ください。歴史担当が懇切丁寧に対応いたします。なお、相談以外にも「古文書」の所在地についての情報提供も受け付けております。現状、置場確保の問題、世代交代、引越しなどで貴重な「古文書」が散逸してしまう事態が多くなってきました。散逸を防ぎ、川崎市の歴史を語る「古文書」を守っていくため、皆様のご協力を何卒いただきたく存じます。

### ◇開館時間

午前8時30分から午後5時まで

### ◇休館日

毎週月曜日  
祝日法に定める休日（休日が月曜日に当たるときは火曜日も休館です。）  
年末年始（12月29日から1月3日まで）

### 川崎市公文書館

〒211-0051  
川崎市中原区宮内4-1-1  
電話 044-733-3933  
FAX 044-733-2400  
E-mail 17koubun@city.kawasaki.jp  
ホームページ 「川崎市公文書館」で検索

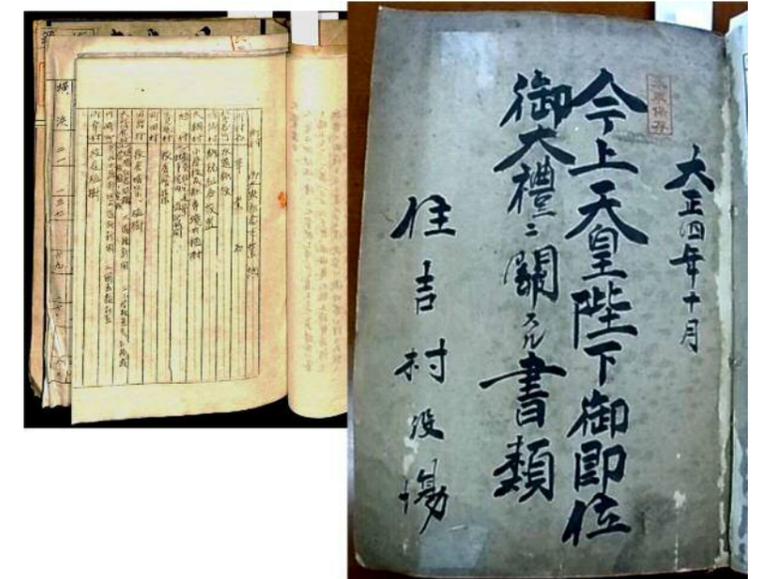
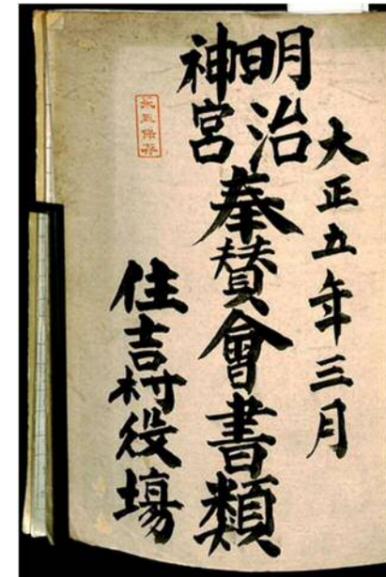


# 川崎市公文書館だより

~Kawasaki City Archives News~



第46号 令和2年2月



昨年、平成の時代が幕を閉じました。元号は「令和」に改元され、即位の礼をはじめ皇位継承式典が行われました。

当館には、大正天皇即位に伴う御大典（即位の礼や大嘗祭等一連の儀式）に関する、市制施行前の住吉村における史料が歴史的公文書として保存されています。式典にあたり、式典進行や服装に関する注意事項などが記載された文書のほか、後に川崎市となる川崎町、御幸村などの各町村において新天皇即位を記念した事業として行われた校舎増築、道路整備、植樹などの記録、また、明治神宮創建に向けて寄付を募った史料や明治神宮完成予想図など、当時の状況を垣間見ることができます。

## シリーズ 古文書の言葉の謎に迫る! No.8 「泥(なず)む」

古文書の言葉シリーズ第8回目は、「泥む」という言葉です。現在はあまり聞き慣れない言葉ですが、近世では、「執着する」や「慣れ親しむ」(＝「なじむ」)というような意味で使われています。しかし、この「泥む」という言葉は、近世以前、全く違った意味で使われていました。

そもそも、この「泥む」は、「泥」という字からも分かる通り、人や馬が進もうとしても障害となるもの(＝泥のようなもの)があり、前に進めない様を表す言葉として、8世紀頃から使われていた言葉でした。そのため、11世紀頃の古辞書には、「阻」という字が「なづむ」の漢字にあてられていることが分かります。

平安時代になると、身体的に前に進めない様から精神的・心理的に停滞する様へと意味が派生していくようになります。有名な土佐日記や源氏物語には、「うまくいかずに思い悩む」という意味で、この「なづむ」という言葉が使われています。

その一方で、古代から中世にかけて、恋心や文章を書くことに悩む様から、「ある物事に関わり続ける。こだわる。執着する。」という意味でも、この「なづむ」という言葉が使われていることが分かります。この「執着する」という意味が、近世になって改めて使用されるようになり、近世中期以降には、「ひたむきに思いを寄せる」という意味や「なれ親しむ」といった現在でも使用する意味へと変わっていくようになります。

このように、言葉の意味は、長い年月をかけて、その時代時代に合った意味で使われるようになり、その意味が人々の間で浸透するようになることで、現在我々が使用している意味へと定着していくようになります。今回の「泥む」という言葉は、近世がその画期といえましょう。

## シリーズ デジタル保存推進担当のお仕事 ~その2~

前々回(第44号)に引き続き、今回のテーマも当館で行っている歴史資料のデジタル化の方法についてです。「デジタル化」といっても、デジタルカメラによる写真撮影や専用の機材を用いたスキニングなど様々な手法がありますが、今回はオーバーヘッドスキャナーによるスキニングと、マイクロフィルムのデジタル化についてご紹介します。デジタル化した史料は、将来的にホームページ上で閲覧・利用できるように整備を進めています。

### (1)オーバーヘッドスキャナーによるスキニング

歴史的公文書や古文書などの古い歴史資料は、紙や綴じ目が脆くなっていることが多く、広げて上から押さえつける普通のスキャナーを使用すると史料を傷めてしまうおそれがあります。そのため、オーバーヘッドスキャナーという非接触式のスキャナーを使い、史料へのダメージを最小限に抑えて撮影しています。



### (2)マイクロフィルムのデジタル化

マイクロフィルムとは、公文書や古文書、新聞、図面などの紙資料をフィルムに焼き付けたものです。マイクロフィルムは限られたスペースで大量の紙資料を効率的に保管できるだけでなく、適切に保管すれば最長500年保存できると言われています。当館でも史料の複製や新聞などのマイクロフィルムを多数所蔵しており、それらのデジタル化が課題となっています。なぜなら、1950年代から80年代に作成されたフィルムのテープ(TACベース)は素材の成分が変質しやすく、フィルムの波打ちやべたつき、酢酸臭の発生などの「ビネガーシンドローム」と呼ばれる劣化現象が起こりやすく、劣化が進行すると閲覧が不可能になってしまうからです(※90年代以降は劣化しにくいPETベースのテープが主流)。当館ではこうしたフィルム画像の消失を防ぐため、マイクロフィルムリーダーを使って画像をスキニングし、マイクロフィルムのデジタル化を進めています。



## 片言隻句

### — 中間書庫機能から見た川崎市公文書館の歴史②-(2)—

前号では伊藤市政下での公文書館設置の経緯を、事務方の要望と公文書の集中管理の二点に注目して取り上げました。今回のテーマは伊藤三郎市長と公文書館構想との関わりです。

伊藤市長は昭和46年(1971年)社共共闘路線下で革新陣営の推薦を背景とし、かつ公害対策推進のスローガンを掲げて前市長の金刺不二太郎(かなさし・ふじたろう)を破って市政に踊り出た人物でした。当時のいわゆる「革新自治体」の首長に数えられる一人です。

伊藤市政では、第三回川崎市議会定例会で述べた「住民自治の息吹が噴出する市民参加の市政を主張し続けております」という方針に表れるように、自治行政と市民との距離を近づける理想を信条としていました(注i)。故に、市が持つ情報を広く市民にも共有する必要があると考えたようです。

当市の情報公開制度は、伊藤市長が昭和55年(1980年)3月の定例記者会見の席上で、制度を段階的に導入するためのプロジェクトチームを作ると表明したことからスタートしました。公文書館構想が現実味を帯びたのは翌56年(1981年)のことです。同年1月、伊藤市長は年頭記者会見で、「情報公開のシステム化について、いっそうの検討を進めるとともに、いわゆる提供可能な市政資料についての具体的対応を図る。さらに公文書館構想の推進を図る。」旨を述べました。そして、同月28日に伊藤市長より「特命指示」が出されたことで計画が具体的に動き出しました(注ii)。川崎市の情報公開制度は、市民が求めた「下からの要請」ではなく、市長のトップダウン方式による「上からの要望」によった首長提案型であり、伊藤市長の意向が強く反映されたものであったことがわかります。(注釈は3ページに掲載)

【2ページ「片言隻句」注釈】(注i)『昭和四十六年第三回川崎市議会定例会会議録(二冊の一)昭和四十六年六月～七月』/ (注ii)「公文書館構想調査研究関係 55年度」、整理番号B1837、川崎市公文書館所蔵。

【「片言隻句」のお詫びと訂正】前45号にて、当市の情報公開制度を紹介する際、「昭和61年1月に情報公開条例施行」と記載しましたが、正しくは「昭和59年10月に情報公開条例施行、昭和61年1月に個人情報保護条例施行」です。